

スクールアイドルのマ ネージャー(仮)

ぽぼろ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

虹ヶ咲学園に通う中須かすみと高原歩、彼が努力してかき集めた虹ヶ咲学園スクール
アイドル同好会の人達、その他μ、s、Aqoursとの日常を記すものである。

という建前の元、ただスクスタの主人公を男にしてイチャイチャさせたかつただけの
小説である。

タイトルは（仮）なので変わる可能性があります。

目 次

プロローグ	—	—	—
せつ菜は食べさせたい	—	—	—
違う人をメインに書いても結局歩夢が強	—	—	—
すぎる不思議	—	—	—
内浦に行こう！	—	—	—
19	13	6	1

プロローグ

「ふあ～眠い。」

「ほら、歩。朝ごはん食べて」

朝、眠い目を擦りながら、俺、高原

たかはら
あゆむ

歩は朝食の待つリビングへと向かつた

「はーい。」

のんびりとご飯を食べているとチャイムがなつた。

お母さんが玄関を開けるとそこには幼馴染の上原歩夢が居た

「お邪魔します。あの……お食事中にごめんね？」

「別に大丈夫だよ。てかもう行く時間だつけ？だつたら早く食わないと！」

急ぎでご飯をかき込む。

「ぐ、ぐほっ！」

急いで食べていたせいか喉に詰まってしまった。

「ああっ！大丈夫だよ！ちゃんとゆっくりよく噛んで食べて？」

「最近はずつと歩夢に迎えに来てもらってるなあ……前は逆に迎えに行つてたのに

……」

「だねー。でも私は嬉しいよ？朝からずっと一緒に……あ。」「どうかした？」

「口の横にご飯粒付いてるよ。取つてあげる」

「べ、別に大丈夫！自分で取れるし！」

「遠慮しなくていいよ。幼馴染なんだし。」

こちらにゆっくりと顔を近づけてくる。

幼馴染だから顔はよく見てているはずだがどうにも女の子に顔を近づけられるというのは慣れないものだ。

「はい、取れたよ。」

「お、サンキューナ。」

「あ、そろそろ行かないと遅刻しちゃうよー。」

「マジか！よし、行くぞ歩夢！」

慌ただしく玄関を飛び出し、学校へ向かつて行つた……

* * *

学校も何事もなく終わり、放課後、俺の足はスクールアイドル同好会の部室へと向

かつては、今スクールアイドル同好会は10人の部員がいる。

その部員を集める為に色々あつたもんだ。

ある日、歩夢とお揃いのキーケースを買った帰りにUTXの前で、sとAqourの合同ライブを偶然目にした。

その皆の楽しそうに踊っているダンスや歌に惹かれて俺はスクールアイドルに興味を持つた

次の日、学校でスクールアイドル同好会を探し出し、そこで中須かすみという少女と会い、生徒会長にお願いをしに行つたら人数を5人以上集めろと言われたためメンバーを集めに東奔西走し集める事が出来た。生徒会長がせつ菜さんだつたことには驚いたが、中々に個性的でいいメンバーが揃つたと思う。

そして、俺の役職は部長兼衣装係兼作曲係だ。

裁縫は小学校の時に全ての家事が1級品の歩夢に教えて貰つてたし、作曲は俺は音楽専攻な為、心配はないのだ。

* * *

次の歌はどうするかや衣装をどうするか悩みながら歩いていると部室に着いた

ガラガラと軽い挨拶と共に扉を開ける

「こんにちはー」

「おー、ゆー君では無いかー、彼方ちゃん抱き枕無いと寝れないんだよねー」「彼方さん、俺の腕に抱きついて寝ないでください。」

「先輩ー！歩夢先輩がかすみんを虐めていますー！」

「え、私？」

「歩夢、お前何かやつた？」

「えー何もやつてないとと思うんだけど……」

「昨日かすみんとプリ撮つたじやないですか？」

「ああ、撮つたな。」

だから皆さんこっち睨まないでくれます？

「それを歩夢先輩に自慢しようとしたら、あつちがマウンントを取つてきて！小さい頃の仲良いエピソードをずっと言われてたんですよ！」

「お、おう……」

かなりご立腹みたいだ。

なんで怒つてるのかは知らないが。

「あの場にしず子も居ましたし。」

「確かにいましたね。かすみさんに2人きりだと恥ずかし……モガモガ」「な、何を言つてるんですかねしづ子は！」

「何か大切な事言おうとしてなかつた?」

(・・・)?

璃奈ちゃんボードを?マークへと変える。

相変わらず凄い早業だよなあ……

「何でもありませんよ！ほら、練習しましよう！スクールフェスティバルに向けてかすみんの可愛さを磨かないといけませんし！」

「なら、ミーティング始めるか。ほら、彼方さん起きて。」

「うーん、あと1440分」

「それだと1日終わりますから……」

こうして俺の高原歩の一日が過ぎていく。

そして、また明日から賑やかな日常が始まるのだ

せつ菜は食べさせたい

今は昼休み、せつ菜さんに生徒会の仕事を頼まれ手伝っている最中。

男らしく力仕事を中心に手伝いつつ、仕事を見つけては積極的に手伝う。もしかしたら内申点上がるかも知れないし。

「あ、これで全部終わりましたよ。ありがとうございました。」

「お疲れ様でした。さあご飯食べに行くか。」

「歩さん、一緒に食べませんか？」

「え、まあ良いんですけど……」

せつかくせつ菜さんに誘われたので、今後のスクールアイドルに役に立つ話を聞けるだろうと思い、生徒会室にある机に座り、コンビニの袋からパンと飲み物を取り出しあるそもそと食べる。

「あれ、歩さんつていつもコンビニパンなんですか？」

「ええ、まあ。親が面倒くさがつて作らないんで。朝ごはんとかは作ってくれるんですけどねえ……」

前に買うの面倒臭いから弁当作つてつて言つたら弁当の中に500円だけ入つてしま

した。またある日は自作の弁当箱が入つてたりしました。」

「一休さんのとんちみたいですね……」

「あ、歩夢には言わないで下さいね。めんどくさい事になるので。確かに料理は上手くて美味しいんですけど、俺の似顔絵のキャラ弁みたいな奴だったり、大好きって書いてたりするんですよ。恥ずかしいったらありやしない。」

「大好きが溢れてるんですね！」

「溢れすぎて大洪水ですよ。むしろ天災並ですわ。愛情表現が大きすぎるというかなんというか……」

「なら、いつもは何処で食べてるんですか？」

「授業終わつたら見つかる前に速攻彼方さんに教えて貰つた昼寝スポットに逃げてます。」

「悪い子ですね。でもコンビニ弁当じや栄養に偏りが出ますよ？」

「親が作つてくれれば万事解決なんんですけどねえ……」

「もし良ければ私がお弁当作つて来ましょうか？」

「良いんですか!?」

「ええ、勿論です。」

「お礼はいづれ絶対にしますから！」

「お礼なんて良いですよ。」

「いいや！しないと俺の気がすみません！」

「なら、一つだけ。これから私をせつ菜と呼んでくれませんか？他の同学年の人には呼び捨てで呼んでいるのに私だけ敬語とか仲間外れみたいで寂しいです。私は敬語が染み付いているので……」

「せつ菜さんは何だろ、同じ学年なんだけどスクールアイドルのアイドルの先輩だから敬意を持たないととか思つてるしなあ……」

最初の生徒会長の怖いイメージが残つてるとか口が裂けても言えないね。」「いや、全部言つてますよ……」

「いや……口が餃子の王将の床並に滑っちゃつて……」

「まあいいです。お弁当を作る条件をそれにします。敬語も外してください」「了解しま……了解。」「宜しい！」

「これで俺はせつ菜さ……せつ菜の手作りお弁当を頂けることになつた。

女の子が自分の為にお弁当作つてくれるつて良いよね。

歩夢？ごめん、何言つてるか分からない。

「ふうん。私を騙してたんだ。へえ、そなうなんだあ。ちよつとあつちでオハナシしよう

か。
歩君。」

ひつ！お、お前いつか r……（こ）の先は血が滲んで読めない）

* * *

今日は弁当を作ってくれる日。

気分がルンルンする！

高揚しすぎてしづくに心配されたりした

「びつくりしました…

先輩が何かおかしくなつちやいました……

叩けば直るでしょうか…？」

「いや、昔のテレビじゃないんだからさ……」

ここは1発愛さんの面白ギヤグで！」

「周りが凍りつくので辞めてください。笑うの歩先輩だけですか。璃奈ちゃんボーダー！」

むつ——」

生徒会室に着き元気な挨拶と共に扉を開く。

「H i t h e r e !」

「わあ！ 急に流暢なイタリア語話しながら入つてこないでくださいよー・びっくりする
じゃないですか！」

「あ、ごめん。楽しみすぎてネイティブ出ちゃつた。」

「……貴方日本人ですよね？ まあいいです。」

ことんとお弁当が目の前に置かれる。

では早速頂こうじゃないか。

パカリと蓋を取ると……

「ん？」

「どうかしました？」

「盛り付け独特過ぎません？」

そこには何故かハンバーグに人参がぶつ刺さつていたり、おひたしに鰹節（削られて
ない奴）がぶつ刺さつていた。

他にも色々あるがこの辺りに
「まあ、良いですけど。」

ハンバーグを一口サイズに箸で切り、口に運び咀嚼する。

このハンバーグを一言で表すのなら

不味い

この一言に尽きる。

でも不味いなんて言つたらせつかく作つてきたのに申し訳ないし失礼だ。

思つた事は口に出ちゃう性格の俺だから必死に耐え

「独特な味ですね。好きな人は好きな味でしょうね」

と言つてかき込んだ。あとで口直しに何か買おう…
うつぶ…

それを練習の時せつ菜がいない時に話したら

「「え〜〜！食べたの（んですか）！」」

「歩先輩は、チャレンジヤー？それともおバカさん？璃奈ちゃんボードはてな」（・・・）
（）？

「いやあ…よく食べれたねえ～愛さんには無理だ。」

「知らなかつたし…盛り付けも独特だつたし。」

「先輩がせつ菜さんの料理食べた為に体調不良でも起こしたらかすみ、生徒会長の座か

ら引きづり落として…生徒会の手伝いという建前の元、先輩と2人きりに……」

「おい、かすみ黒い面出でるぞ」

「そんな事ないですようふふ」

「そう言えば歩君も料理は小さい頃から出来なかつたよね。もしかしたらせつ菜ちゃんと同じくらいかも……」

だから私歩くんの為にいっぱいお料理勉強したんだ。」

「言うな歩夢。恥ずかしいだろ！」

恥ずかしながら俺も料理は全く出来ない。

「先輩、やつぱり奥さんとかは料理出来た方が良いですか?! 例えばかすみ見たいに。」

いや、俺の聞いたつて意味無いだろ。

お前らそれぞれの好きな人に聞きなさい

その後皆からは呆れた顔をされるのであつた。

明日からは歩夢が弁当を作ってくれる見たいです。（白目）

ハートはやめて欲しいなあ…

違う人をメインに書いても結局歩夢が強すぎる不思議

俺は自分の無力さを呪つた。

こんなに目の前で大変な目にあつてている人がいると言うのに俺は何も出来ない。

——ヒーローなんて存在しない——

そう、この世の中にはヒーローなんて存在しない。

屁理屈かもしれないが、見方によつてはヒーローが悪にも見えるのだから。みんなを助ける小さい子が憧れるヒーローなんて存在しないのだ。

それを俺は悟つた。

「櫻あああああ！死んじやダメだあああ！」

ゲームで。

「わわっ！歩君急に大声出さないでよ！びっくりしたじやん！」隣の椅子に座り、一緒にギャルゲー的な奴をプレイしていた歩夢が驚いたように声を上げた。

「歩夢……俺は今とても悲しい気分なんだ……うう……桜が……」

さつきから言っている桜というのはゲームの中の登場人物で、棚からぼたもちが落ちてきてそれが喉に詰まり死んでしまうという涙を誘う死に方をしてしまった。主人公は、丁度出掛けている時にだ。

助ける人もなく……

「よしよし、歩君が泣いてると私も悲しいなあ。」

「歩夢う……」

優しく、優しく頭を撫でてくれる歩夢。

心が安らぐようだ。悲しみが癒される。

「かすみ達は今何を見せられているんでしょうか……」

「2人でずっと歩んで来たんだもんね。歩だけに！」

「すいません、愛先輩少しだけ黙つてくれませんか！」

その後めっちゃ歩夢に慰めてもらつて立ち直つた。
やつぱ持つべきは幼馴染だな！

あ、でも死に方にヒーロー関係なくね？
まいつか

練習後の静寂の部室で1人が怪しげに笑つている。
「ぐふふ……これで、歩先輩を……ぐふふ」

闇が迫り始めている。

「あわわわ……大変……」

* * *

昼休み、彼方さんと昼寝を貪っていたら、突然かすみに部室に呼び出された。

大切な話があると言う事らしい。

衣装のサイズ変更とかかな…？前に恥ずかしいからって急に呼び出されて言われた事あるからさ。

ガラガラと鳴る扉を開け、中にいるか呼びかける。

「あ、やつと来ました？」

「お前が早く来いって言つたからダツシユで来たわ」

「あ、ならお茶でも飲みます？」ガチャ

「あ、貰う。あと何で鍵を閉めた？」

「聞かれて少々困るからです。」

ほう、と相槌を打つてゴキュゴキュとお茶を飲み干す。

「あ、やつと飲んでくれましたね……」

トロンとした目でこちらを見つめている。

あれ…眠気が……

「お前……なにを盛った……？」

「盛るなんて人聞きの悪い、入れてあげたんですよ。

プロテインを

「そう言えばそんなに眠くないや。」

思い込みつて怖いね。こいつがいかにもヤンデレっぽい行動取るから入ってるのが
催眠薬だと思い込んだじやないか

「筋肉付けたいとか言つてたじやないですかあ～」

「まあ、言つたけど……勝手に入れんなよ…

せめて言え。勝手にムキムキにしようとするな。」

「言つたらつまらないじゃないですか～」

「何したの！かすみちゃん！」

鬼気迫る様な表情で飛び込んできた歩夢

「ど、どうした歩夢？」

「うん、あのね…ご飯食べてたらメールが届いてね？あ、貴方の携帯に届くメールが私の方にも届くようになつてるんだけど……」

「おい、こらそれ初めて聞いたぞ」

「先輩、愛されてますね……」

「そしたらかすみちゃんに呼び出されて、しづくちゃんに昨日何か変な笑い声が聞こえたつて言うから、何か大変な事になつてるんじゃないかと……」

「おう、何も無いぜ。

「お前からさつき大変な事が分かつたけどな。」

「あ、何か飲んだり食べたりした？したら早くペつ！つてして、早く！」

「い、いや大丈夫だから……」

この騒動は歩夢の登場により、少しだけ収まつた。更に新たな問題を生んだけどな。

なんであいつはいつもいつも俺がいる所に現れるんだ……

内浦に行こう！

白い砂浜！ 青い海！ サンサンと照りつける太陽！ ここは素晴らしい！
突然だが俺は今沼津にいる。

Aqoursの調査をする為にわざわざ来たのだ。詳しくは少し前に遡る……

「歩さん、貴方には明日からAqoursの調査に行つてもらいます！」
「は？」

今日も今日とてスクールアイドルフェスティバルに向けて練習してたある日、目の前にいる生徒会長からそんな事を言われた。

突然過ぎるんだが？

「いやいや、突然言われても……」

何より明日も学校あるじゃないですか」

「私は生徒会長ですよ？ その位の権限はありますよ」

「いやいや、おかしいおかしい。たかが一生徒に同じ生徒の公欠とかを取れる権利がある訳ないだろ！ それはアニメだけの世界だろ」「これからスクールアイドルとしてパワーアップする為に内浦でAqoursの練習を見に行つてください！」

「本当にお願ひだから話を聞いてくださいません？」

「出発は明後日なのでよろしくお願ひします！」

「急過ぎないですか!?」

と生徒会長に告げられ。

出発の日

「十分に気をつけて下さいね！ ちゃんと毎日連絡下さいね！ ちゃんとご飯は食べてくださいね！」

「そんなに心配しなくとも大丈夫だつて、しづく」

「私がちやんとお世話するから大丈夫だよ」

「浮気はダメ、歩は私達のマネージャーなんだから絶対にしちゃダメ。瑠奈ちゃんボーナムー！」（？・ H ・ ?）

「いや、浮気つて……まあいいやよしよし」

「歩くんに手を出したら私が成敗するから大丈夫！」

「抱き枕要因がいなくなつて彼方ちゃん悲しい～しくしく」

「いや抱き枕にすんな」

「そうだよ！ ギューッとしていいのは私だけなんだよ！」

「それじや十分に気をつけて行つてきて下さいね！ 歩さん！ 急だつたのは申し訳な
く思つてます……」

「そう思うなら次からは辞めてくれ……」

「ほら、そろそろ行こ？」

「あ、そうだな…………ん？」

「今ちよつとおかしい所が会つたような……」

「何で歩夢も行こうとしてんの？ 自然すぎて気づかなかつたわ」

「だつてずっと一緒じゃん……片時も離れたくないの……」

「いや……俺だけで十分だし」

「私が居ないと歩君が死んじゃうじゃん！ 私が居ないとお世話しないとダメじゃん

！」

わーわーと子供の様に喚く歩夢

「ほら、歩センパイの邪魔になるので戻つてくださいよ！ 今のうちに歩センパイは早
く行つてください！」

かすみが後ろから羽交い締めをして大人しくさせる

「助かる！ じゃあな、かすみ！」

「あああ！ 待つて！ 歩くん！ 歩くうううん！」

という訳で来たんだったな。相変わらずやつかいや幼馴染だ。

こつちには前に来てお祭りだかのやつをAqoursの人達と一緒にやつた気がする。

ん？ 何かあつちに見たことがある様な人達が……

「あああ！ あゆむくんだ！」

「全速前進ヨーソロー！」

「千歌ちゃんも曜ちゃんもそんな突撃しに行かないで！」

「来たわね！ リトルデーモン！」

「楽しくなりそうだね！ 花丸ちゃん！」

「また喧しくなりそうずら」

「oh！ マリーに会いに来てくれたのね！」

「また一緒に海に潜りたいなあ。賑やかになりそう」

「そうですわね。……つて鞠莉さんも突撃しに行かないでください！」

「やめろやめろ鳩尾に的確に頭を擦り付けるな。そんな飛んで抱きついてくるなあア！」

「で歩さんはなぜこちらに？　連絡はなかつたはずですが……」

「それはですねダイヤさん」

「マリーに会いに来たんでしょ？　んもおいつでもマリーから会いに行つて上げるし、読んでくれたら行くのに……」

「厄介事になりそうなので辞めてください。來た訳はですねうちのポンコツ生徒会長からいきなり言われたんですよ。ここと言いウチといい音ノ木坂と言い生徒会長って言うのはポンコツばつかなんですかね。」

「ちよつと！　それはどういう意味ですの！」

「まあ、多分A q u o r sの練習を見て何か学んでこいという事でしょう。つて事で沼津に遊びに行きましたよ。遊んで遊んで遊び倒しましたよ」

「いや、1秒前に自分が言つたこと忘れちゃダメでしょ……」

呆れた様にそう言つた果南さん。アイツらの命令何か知らんわ。

「つて事で善子！ 行くぞ！」

「ヨハネ！ つて……何で私なのよ」

「だつてお前沼津出身じやん」

「あの……2人きりは恥ずかしいと言うか……デートっぽくて照れるというか……」
「そのまえにちょっとまつた！」

遊びに行こうとしたのを千歌に止められる。

「どうかした？」

「学んできてつていうからにはこつちに泊まるの？」

「いや、別に日帰りでも……」

「 泊 ま る の ？」

「あの……日帰り……」

「 泊 ま る の ？」

「アツハイそうさせて頂きます」

「なら十千万に決まりだね！ 部屋なら空いてたきがするし！ 志満姉に伝えないと

！」

「千歌つちくちよつとWait! ねえ？ 歩、マリーのホテルにしない？ very
s p e c i a lなスイートルームをご用意するわ！」

ホテルオハラのスイートルームだと……？

「あー！　流されちゃダメだよ！　十千万の方がいいもん！　歩くん前に来た時にうちだつたじやん！」

「ふふつ、こつちは最高級のサービスとお部屋、夜景に海を見渡せるspecialなお部屋よ。

そしてマリーとvery hotな夜を一緒に過ごしましょ？」

その後も言い合う2人。ここは俺が決めないとダメか……

「なら、今回も十千万にお世話になるわ。鞠莉の奴も嬉しいけどそんないい所だと落ち着かないし」

「ムムつ！　十千万もいい所だよ！」

「あ、ごめん。高級な所だとね」

こうして俺の沼津の生活が始まつた。